

# 山形城三の丸跡第 13 次発掘調査説明資料

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成 25 年 10 月 21 日

## 調査要項

遺跡名(番号) 山形城三の丸跡(県番号 201-002)  
所在地 山形県山形市城北町・大手町  
時代・種別 奈良時代・平安時代・中世・近世、城館跡  
起因事業 一般国道 112 号霞城改良事業  
調査依頼者 国土交通省東北地方整備局  
山形河川国道事務所  
調査機関 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター  
現地調査 平成 25 年 5 月 20 日から 10 月 31 日まで  
調査面積 2,700㎡  
調査担当者 専門調査研究員 小林圭一(現場責任者)  
調査研究員 川崎康永  
東海林弘和  
市川光紀



遺構位置図

## 調査成果(10月21日現在)

検出遺構 竪穴住居跡・溝跡・河川跡・土坑・井戸跡  
出土遺物 土師器・須恵器・縄文土器・陶磁器・瓦・硯・金属器・銭貨

## 1 調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城(本丸・二の丸)を取り囲む東西約 1.6km、南北約 2 kmの広大な城館跡で、文禄・慶長年間(1592～1615年)に最上氏第 11 代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したと言われおり、国内では 5 番目の広さで、奥羽地方では最大の城でした。しかし最上氏は元和 8 年(1622 年)に第 13 代義俊が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返し、石高も 57 万石から 5 万石まで削減され、広大な山形城を維持することが困難となり、手入れが行き届かず、幕末期の水野氏 5 万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたと言われていす。今回の発掘調査は、国道 112 号の拡幅工事に起因するもので、一昨年の第 9 次調査、昨年の第 11 次調査に続いて実施されました。昭和橋の西側の城北町を F 区、東側の大手町を G 区と H 区と三つの調査区に区分して実施しました。



## 2 見つかった遺構と遺物

昭和橋西側の F 区では、石組みの井戸跡が 2 基検出されました。そのうちの 1 基は石組みの直径約 1 m、深さは地表面から 2 m以上に達するもので、周辺から出土した陶磁器類から、近世に作られ使用されたと推定されます。

昭和橋東側の G 区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が 6 棟、近世の井戸跡が 2 基、その他に近世～近代にかけての土坑や溝跡が検出されました。竪穴住居跡は一辺が 4～6 mの方形で、深さが 10～30cm程度と浅く、主軸は 4 方位を向いており、いずれも出土土器から 8 世紀代の住居跡と考えられています。近世の土坑では、捨てられた瓦がまとまって出土した土坑が 2 基検出されました。瓦の文様から 17 世紀中頃～後半にかけての瓦とみられ、建物の改修などで廃棄されたと考えられます。

遺物としては、古墳時代の土師器や奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世の陶磁器類が出土しています。中には 16 世紀末～17 世紀初め頃に九州の唐津で作られた陶器など、最上氏の時代に関係した遺物も含まれています。

## 3 まとめ

今回の調査では、奈良・平安時代～近世・近代まで各時代の遺構・遺物が検出されました。特に古代の住居跡が 6 棟検出され、生活の重要な場所になっていたことを確認することができました。江戸時代には武家屋敷となっていた一帯は、古代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤に城下町が形成され、それが近代の山形市街地へとつながったと考えられます。現在の県都である山形市の中心地には、古代から連綿と続く人々の生活の跡が残っています。



F 区 井戸跡



G-1 区 竪穴住居跡完掘状況



G-1 区 土坑から出土した陶磁器、硯、瓦

# G-2区 遺構配置図



SK1313 瓦



SK1298 土師器 (甕口縁部)



SK1312 青磁



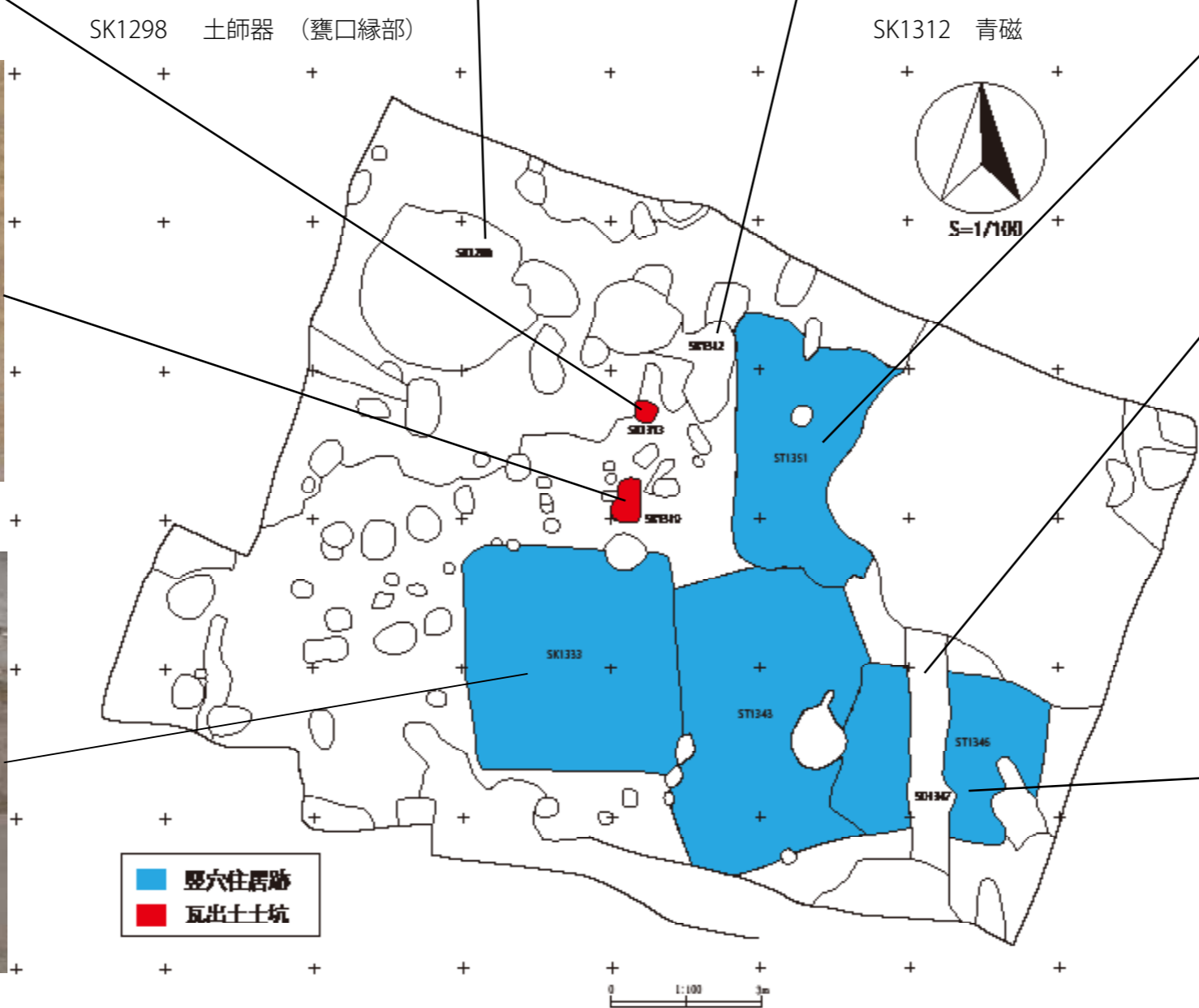
ST1351 土師器、内黒碗



SK1319 瓦



ST1333 竪穴住居跡断面 (西から)



SD1347 須恵器



ST1346 土師器、須恵器